

荒海の槍騎兵2

激闘南シナ海

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

地図・図版 安達裕章

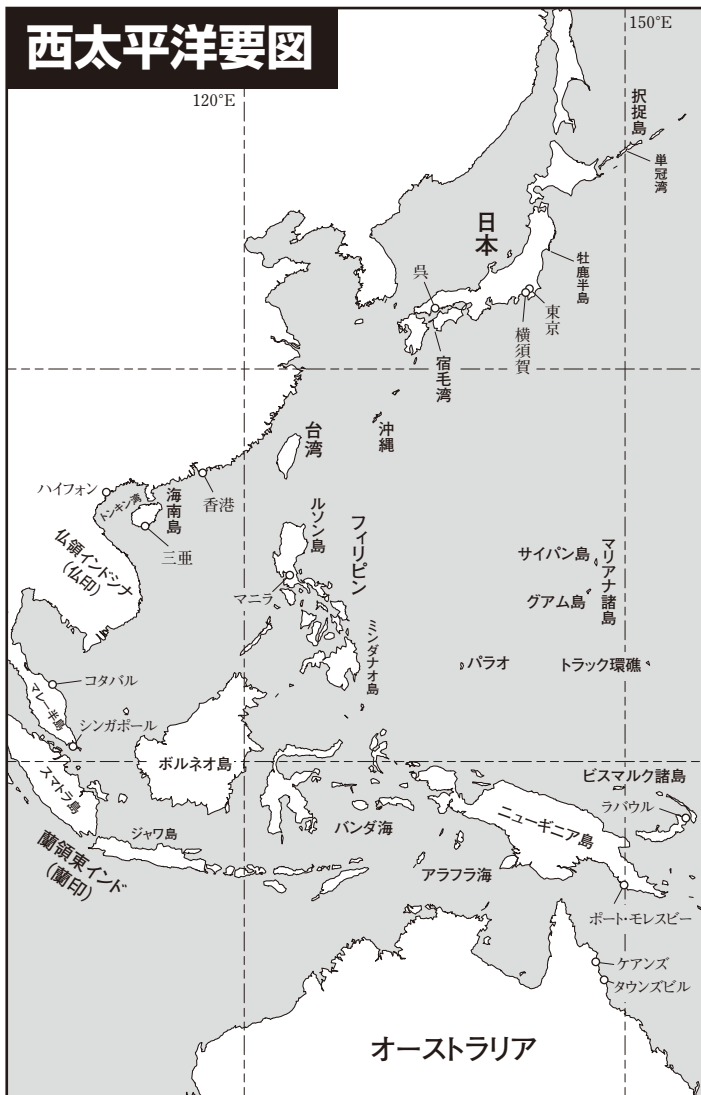
編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章	巨大なる追跡者	9
第二章	天を突く艦 ふね	41
第三章	反撃の海鷲	73
第四章	太平洋艦隊の選択	115
第五章	暁の対決	141
第六章	諜者還る	211



西太平洋要図



フィリピン要図





荒海の槍騎兵 激闘南シナ海 2

第一章 巨大なる追跡者

1

敵の巨弾は、輪型陣りんけいじんの中央に落下した。

日本帝国海軍南遣艦隊なんけんたい旗艦「鳥海」の後方で、海面が大きく伸び上がり、マストを超える巨大な海水の柱がそそり立つた。

「危ない……！」

第六戦隊砲術参謀桃園幹夫少佐の口から、悲鳴にも近い声が漏れた。

「鳥海」に将旗しょうきを掲げているのは、南遣艦隊司令官小沢治三郎中将。帝国海軍でも、知将と謳うたわれる指揮官だ。

小沢が「鳥海」と運命を共にすれば、帝国海軍は重巡一隻を失うだけではない。人材の面でも、計り知れない打撃を受ける。

「水柱六本確認！」

第六戦隊旗艦「青葉」の艦橋に、見張員が報告

を上げた。

「青葉」は、第六戦隊第一小隊の僚艦「加古」と共に、輪型陣の右方を固めているため、「鳥海」は左舷側に見える。

「六発か。前部の主砲全てを撃つて来たな」
首席参謀貴島掬徳中佐が呟いた。

「敵艦、第二射！」の報告が上がり、新たな敵艦の飛翔音が聞こえ始める。

昨夜——二月一日夜、海南島の南東岸沖で、何度も繰り返し聞かされた敵艦の飛翔音だ。

今度は、「鳥海」の左舷正横に落下し、艦の反対側に、奔騰する水柱が見えた。

「砲術、敵との距離報せ」
フタサマル

「二三〇（二万三〇〇〇メートル）！」

「青葉」艦長久宗米次郎大佐の問いに、砲術長岬恵介少佐が返答する。

「二万以上も遠方では、どうにもならぬか」

第六戦隊司令官五藤存知少将が舌打ちした。

「青葉」が装備する六五口径一〇センチ高角砲、通称「長一〇センチ高角砲」は、最大射程一万四〇〇メートルだ。

「鳥海」を援護したくとも、敵には届かない。

仮に届いたとしても、直径一〇センチの小口径砲弾では、たいした損害は与えられない。

相手は戦艦——それも英国海軍の最新鋭戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」なのだ。

「艦長、観測機を墜として下さい」

桃園は久宗に言った。

南遣艦隊の上空には、敵の水上機が貼り付き、後方の「プリンス・オブ・ウェールズ」に弾着位置を伝えている。

この機体を撃墜すれば、「プリンス・オブ・ウェールズ」は弾着観測に支障を来し、射撃精度が低下するはずだ。

「艦長より砲術。敵観測機を撃墜せよ！」

久宗は桃園に頷いて見せ、射撃指揮所に命じた。

その間に、敵の第三射弾が飛来する。

弾着位置は、「鳥海」の右舷側海面だ。六本の水柱がそそり立ち、巨大な海水の壁が「鳥海」を隠す。「青葉」の艦上から見守る身にとっては、背筋が寒くなる光景だ。「青葉」が標的になっていたとしても、ここまでの恐怖は感じないかもしれない。

「鳥海」に乗る小沢治三郎中将は、それほど貴重な人材だった。

幸い、「鳥海」は無事だった。海水の壁が消え去ると同時に姿を現した。

（見上げた執念だ、フィリップス提督）

桃園は、敵の指揮官——英国東洋艦隊司令長官トーマス・フィリップス大將の名を呟いた。

昨夜の、海南島南東岸沖における海戦では、彼我の間に圧倒的な戦力の差があった。

フィリピンより東進してきた米太平洋艦隊と英国東洋艦隊の連合軍艦隊は、戦艦だけでも一二隻。

対する日本軍の南方部隊——近藤信竹中将が率い

る第二艦隊と小沢治三郎中将が率いる南遣艦隊は、戦艦を二隻しか持たない。

勝敗は歴然としていたが、南方部隊は鳥影を利用して敵弾の直撃を回避し、辛くも全滅を免れた。

のみならず、雷撃によって敵戦艦一隻を轟沈させ、戦艦一隻を落伍に追い込んだ。

代償として、戦艦「金剛」「榛名」、重巡「愛宕」「高雄」、軽巡「川内」、駆逐艦六隻を失い、近藤司令長官以下の第二艦隊司令部が全滅したが、生き残った重巡五隻、防空巡洋艦二隻、駆逐艦一八隻は戦場から脱出し、連合艦隊司令部から指定された合流地点に向かったのだ。

だが、米英艦隊は南方部隊の撃滅を断念したわけではなかった。

英国戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」が駆逐艦二隻を従え、追撃して来たのだ。

最大戦速を発揮できれば、敵を振り切ることも可能だが、「鳥海」は機関故障のため、速力を一四ノ

ットまでしか出せない。

選択肢は二つ。反撃に転じるか、敵弾を回避し続けるかだ。

前者を選んでも、成算はない。

夜戦であればまだしも、現在の時刻は二月一日の一時二十八分（現地時間一〇時二十八分）だ。

空には、ところどころにちぎれ雲が浮かんでいる程度であり、海面は遠方まで見通しが利く。

「プリンス・オブ・ウェールズ」は、南方部隊各艦の主砲の射程外から、悠々と直径三五・六センチの巨弾を撃ち込めるのだ。

一八隻の駆逐艦は、昨夜の戦闘で魚雷を撃ち尽くしている。

「鳥海」と七戦隊の重巡四隻は魚雷を残しているが、敵との距離が開きすぎ、命中確率は小さい。

残された道はただ一つ。敵弾を回避しながら時を稼ぎ、連合艦隊の救援を待つ以外にない。

「目標、上空の敵観測機。砲撃始めます」

岬恵介砲術長が復唱を返した。

声は、昨夜よりも落ち着いている。戦艦相手の戦闘を経験したことで、腹が据わったのかもしれない。

数秒後、「青葉」の前甲板に発射炎が閃き、砲声が艦橋を包んだ。

各砲塔の一番砲、合計六門の長一〇センチ砲が、砲門を開いたのだ。

上空から、一〇センチ砲弾六発の炸裂音が届く。続けて各砲塔の二番砲六門が火を噴く。

「『加古』撃ち方始めました！」

艦橋見張員が、僚艦の動きを報告する。

「加古」は昨夜の戦闘で、高角砲一基を失ったが、残る五基一〇門の長一〇センチ砲に大仰角をかけ、砲撃を開始したのだ。

「プリンス・オブ・ウェールズ」に捕捉される前、「青葉」と「加古」は、米軍の四発重爆撃機ボーイングB17 フライニング・フォートレス——「空の要塞」の異名を持つ機体四機を墜としていている。

鈍足の水上機ぐらい、容易く撃墜できるだろうと思っていた。

ところが、「敵機撃墜」の報告は、なかなか届かなかった。

「青葉」は第三射、第四射、第五射と、連続して一〇センチ砲弾を撃ち上げ、「加古」も負けじと砲撃を繰り返すが、それらが敵機を捉えることはない。

一〇センチ砲弾は、無駄に弾片をばら撒くだけだ。その間にも、「プリンス・オブ・ウェールズ」の三五・六センチ砲弾が飛来し、「鳥海」の周囲に弾着の水柱を噴き上げる。

「砲術、どうした！」

たまりかねたように久宗が叫んだとき、上空で一際巨大な爆発音が轟いた。

「敵観測機、撃墜！」

岬が、喘ぐような声で報告する。

弱敵と侮っていた敵機に、意外と苦戦した様子だ。

「鈍足の水上機に手こずるものだな」

「敵機が逃げ回ったためでしょう」

貴島首席参謀の一言に、桃園は応えた。

英軍の観測機——フェアリー・ソードフィッシュの水上機型は、複葉羽布張りという古めかしい機体だが、翼面荷重が小さく、旋回性能が高い。

右に、左にと逃げ回ったため、狙いが定まらず、なかなか墜とせなかったのだろう、と見解を述べた。

「後部見張りより艦橋。敵艦沈黙！」

新たな報告が、艦橋に届く。

「プリンス・オブ・ウェールズ」は、観測機を失い、射撃精度を確保できなくなったため、一時的に砲撃を中止しようだ。

「少し時間を稼げるな」

五藤が桃園に微笑を向けた。観測機を狙うとの判断は見事だった、と言いたげだった。

静寂は、長くは続かなかった。

「左一七〇度に機影確認。新たな観測機です！」

後部見張員が報告を送って来た。

「プリンス・オブ・ウェールズ」は、二機目を繰り出したのだ。

「砲術より艦長。目標、後方より接近せる敵観測機。引きつけてから撃ちます」

久宗が命令を出すより早く、岬が宣言するように報告した。

岬は近距離から撃つことで、必中を狙うと決めたようだ。

観測機の爆音が、微かに聞こえ始める。

「そろそろか？」

桃園が口中で呟いたとき、

「敵観測機、右に旋回。本艦を回避する模様！」

見張員が叫んだ。

桃園は、右舷側を見た。

複葉の水上機が大きく旋回しつつ、輪型陣の前方に回り込むとしている。

敵は「青葉」の対空火力に恐れをなし、回避を

ったのだ。

岬が「撃ち方始め！」を下^か令^{れい}したのだろう、「青葉」の長一〇センチ砲が火を噴いた。

第一射弾は、敵機の後ろで炸裂し、弾片をばら撒くだけに留^{とど}まった。

「青葉」の長一〇センチ高角砲が左に旋回し、敵機の動きを追う。各砲塔が砲撃を繰り返すが、敵機を捉える射弾はない。

敵の観測機は、長一〇センチ砲の射程外を飛び、

「青葉」の射弾に空を切らせたのだ。

「前^{ぜん}車^{しゃ}の轍^{てう}は踏^ふまぬということか」

舌打ちしつつ、桃園は呟いた。

「青葉」の長一〇センチ砲が沈黙したとき、

「敵艦発砲！」

後部見張員の報告が飛び込んだ。

再び、敵弾の飛翔音が轟き、「鳥海」の艦首付近に弾着の水柱が奔騰した。

艦が水柱の中に突っ込み、しばし姿が見えなくな

るが、ほどなく飛沫^{しぶき}の中から、「鳥海」が特徴ある姿を現した。

「鳥海」より受信！『各艦ハ我^{われ}ヲ省^{かえり}ミズ避^ひ退^{たい}セヨ』

通信室に詰^つめている通信参謀^{せきのひで}関野英夫少佐が報告した。

小沢の意図^{いと}は明白^{めいはく}だ。

「プリンス・オブ・ウェールズ」の最大速度は二八ノットであるから、各艦が最大戦速を発揮すれば、避退はできる。

「鳥海」とその乗員八三五名、小沢以下の南遣艦隊司令部署^{ばくろ}僚^{りょう}は犠牲^{ぎせい}になるが――。

「六戦隊針路二五五度。『加古』に信号。『我二続ケ』五藤が意を決したように命じた。

次いで、いたずらを企^{たくら}む悪童^{あくどう}のような表情で久宗に言った。

「本艦の通信機は故障中だ。『鳥海』から何か言ってきたが、受信はできなかった。そうだな？」

「呉に戻ったら、工廠の連中に文句を言つてやらねばなりません」

久宗が笑いながら答えた。

五藤の言葉の意味が分からぬ者はいない。

第六戦隊の二隻は、「鳥海」と小沢長官を守るため、「プリンス・オブ・ウェールズ」に勝算のない戦いを挑もうとしている。

「航海、面舵一杯。本艦針路——」

久宗が下令しかかったとき、

「敵観測機、反転。避退します！」

艦橋見張員が、歓声混じりの報告を上げた。

「味方艦の対空射撃か？」

久宗の問いに、見張員は予想外の答を返した。

「零戦です！ 味方機の来援です！」

2

敵の複葉機が機体を翻し、慌てふためいて遁走

してゆく姿は、九七式艦上攻撃機のコクピットからも、はっきり見えた。

空母「飛龍」の飛行隊長と艦攻隊長を兼任する楠美正少佐は、視線を海面に転じた。

南方部隊の後方に、一隻の戦艦が見える。

米海軍の主力戦艦とは、異なる形状だ。艦の中央には、箱のようにがっしりした艦橋が鎮座している。英国海軍の最新鋭戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」。

予定通り、真珠湾攻撃が行われていれば、第一航空艦隊の艦上機が遭遇することはなかった艦だ。

「福田、全機宛発信。『敵発見。突撃隊形作レ』」

楠美は、指揮官機の電信員を務める福田政雄一等飛行兵曹に命じた。

第二航空戦隊の艦攻全機——楠美が直率する「飛龍」艦攻隊と、阿部平次郎大尉が率いる「蒼龍」艦攻隊が左右に分かれた。

南方部隊の上空を通過しつつ、高度を下げる。味

方の巡洋艦、駆逐艦が、後方へと消える。

「永久に足止めしてやる」

第一中隊を先導しつつ、楠美は敵艦にその言葉を投げかけた。

第一航空艦隊はこの日、第一艦隊と共に、台湾・高雄と海南島・三亜港の中間海面に進出した。

夜明けと同時に索敵機が飛び立ち、敵艦隊の搜索を開始したが、「敵艦隊見ユ」の第一報が入電する前に、南遣艦隊からの緊急信が飛び込んだ。

「我、敵ノ追撃ヲ受ク。敵ハ戦艦一、駆逐艦二。戦艦ハ『プリンス・オブ・ウェールズ』ト認ム。位置『三亜港』ヨリノ方位七五度、二〇〇哩。一〇三七（現地時間九時三七分）」

との電文が、「鳥海」より発せられたのだ。

一航艦では、第一次攻撃隊として一八三機を準備していたが、戦艦一隻にこの数は多すぎる。

英艦隊を攻撃している最中に、米艦隊が出現する可能性もある。

一航艦司令部では、それらを考慮し、二航戦の攻撃隊を救援任務に充てると決めたのだ。

「目的は、南遣艦隊の救援だ。敵戦艦は撃沈に至らずとも、足止めするだけで充分だ」

「飛龍」の飛行長川口益少佐は、楠美らにそう言ったが、「足止め」だけで終わらせるつもりは、楠美にはない。

二航戦の艦攻隊は、「飛龍」「蒼龍」共に一八機。

真珠湾攻撃が予定通りに実施されていれば、一部の機体は重量八〇〇キロの徹甲爆弾を搭載し、水平爆撃を行うことになっていたが、任務が変更になったため、全機が雷装で出撃している。

三六機で雷撃をかければ、撃沈は可能だ。

「敵戦艦、面舵！」

偵察員の近藤正次郎中尉が叫んだ。

報告された通り、「プリンス・オブ・ウェールズ」が右に回頭を始めている。

攻撃隊の動きを見て、回避運動に入ったのだ。

「逃がしはせん」

楠美は、その言葉を敵に投げかけた。

「プリンス・オブ・ウェールズ」は、三五・六センチ主砲一〇門の火力と、二八ノットの最高速度を併せ持つ高速戦艦だが、航空機に比べれば遙かに遅い。楠美は敵艦の動きを睨みつつ、「飛龍」艦攻隊の一七機を、海面近くの低高度まで誘導する。

一個中隊六機ずつ、三隊に分かれ、横一線に展開する。

三段構えの雷撃だ。第一中隊が失敗しても第二中隊、第三中隊が、連続して雷撃を敢行する。

突撃に移ったときには、「プリンス・オブ・ウェールズ」の針路は逆向きになっている。

「飛龍」隊は、目標の左舷側から突撃する形だ。

「敵艦発砲！」

近藤が注意を喚起した。

楠美は顔を上げ、正面を見据えた。

「プリンス・オブ・ウェールズ」が回頭しながら、

艦上に発射炎を閃かせている。

楠美機の前方や左右で敵弾が炸裂し、黒々とした爆煙が湧き出す。

弾量は、さほど多くない。「プリンス・オブ・ウェールズ」ほどの巨体であれば、相当数の高角砲、機銃を装備できるはずだが、射弾の密度は低く、狙いも正確とは言えない。

（英海軍らしくないな）

そんな疑問が、楠美の脳裏をかすめた。

英海軍は欧州でドイツ空軍と戦い、航空機の脅威を思い知らされているはずだ。その英海軍の戦艦が、対空兵装の強化を怠るとは考え難い。

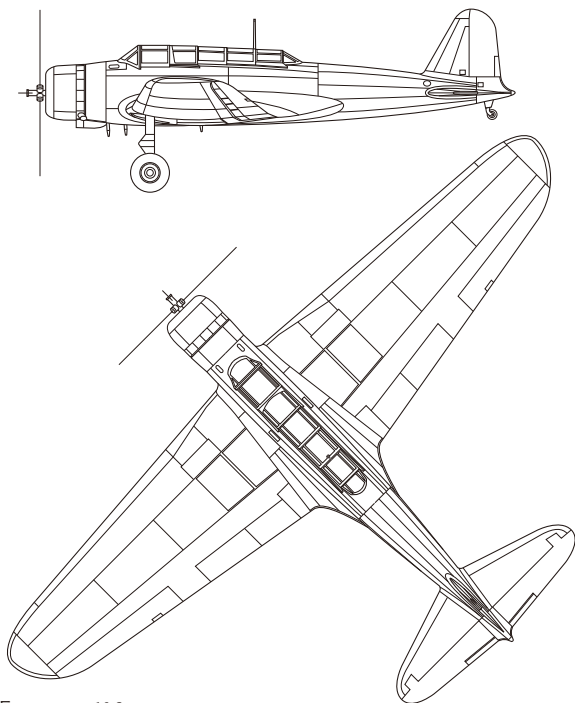
疑問に囚われたのは、ごく一瞬だ。意識を、目の前の敵戦艦に集中する。

現在の距離は二〇（二〇〇〇メートル）。

射点は、まだ少し遠い。必中を期すには、ぎりぎりまで距離を詰めた。

照準器の白い環の向こうに、白波を蹴立てる巨

日本海軍 九七式艦上攻撃機



全長	10.3m
翼幅	15.5m
全備重量	3,800kg
発動機	栄一型 970馬力
最大速度	378km/時
兵装	7.7mm機銃×1丁(後席旋回) 800kg魚雷×1 または 爆弾 最大800kg
乗員数	3名

中島飛行機が開発した艦上攻撃機。昭和12年1月に初飛行、その後、発動機を栄一型に変更し、量産が開始された。日本海軍としては初めての全金属製、低翼単葉機で、引込脚の採用によりそれまでの九六式艦上攻撃機に比べ時速100キロ以上高速化している。ほかにも、可変ピッチプロペラ、密閉式コクピットなど、数々の新技術が投入されている。

昭和16年現在、主力艦上攻撃機として各空母部隊に配備されている。

艦の艦首が見える。飛沫の激しさから見て、最大戦速で航進こうしんしていることは間違いない。

「ちよい左」

自身に確認するように呟き、針路を僅わずかかに左へとずらす。

敵の艦上に新たな発射炎が閃き、真っ赤な火箭かせんが飛んで来る。

楠美は、操縦桿そうじゅうかんを前方に押し込む。

機体なまがらが、波頭なみがしらに接触しそうな高度まで下がる。

海面が、手を伸ばせば届くのではないかと思えるほど近づく。

敵弾は楠美機の頭上をかすめ、後方へと抜ける。

弾量はさほど多くないが、油断は禁物きんぶつだ。開戦後、三日目で、戦死者名簿に載りたくはない。

目標との距離が一〇〇〇メートルを切る。

楠美は操縦桿を微妙に調整し、「プリンス・オブ・ウェールズ」の未来位置に照準を合わせる。

「〇八マルハチ（八〇〇メートル）……〇六マルロク……」

声に出して、目標との距離を測る。数字が小さくなるにつれ、「プリンス・オブ・ウェールズ」の姿が拡大し、細部がはつきりする。

「用意、てっ！」

一声叫ぶと同時に、楠美は投下レバーを引いた。

足下あしもとから機械の動作音が伝わり、九七艦攻が積み上げられるように上昇した。

重量八〇〇キロの航空魚雷を投下した反動で、機体が飛び上がったのだ。

「一中隊、全機発射！」

偵察員席の近藤が、興奮した声で報告を送る。

楠美機は「プリンス・オブ・ウェールズ」の前甲板上空を飛び越し、右舷側へと抜けた。

首を右にねじ曲げ、「プリンス・オブ・ウェールズ」の艦上を見たとき、楠美は同艦の対空砲火が弱々よわよわしかった理由を悟さとった。

戦艦の巨弾を撃ち込まれた跡は見当たらないものの、艦橋や煙突えんとつの脇わきに、おびただしい破片が散乱し

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。